



## 私の幼児教育論

畠中 徳子

これは「幼児教育論」というより、今、私が幼児教育科の学生に接していて、あるいは大学の乳幼児研究室での幼児の集団指導や教育相談を通して幼児と出会って、感じて、考えたり、又母親としてかつて幼児を育てた経験から、「こういうことが大事なのではないか」と考えるに至ったことの一つである。

幼児教育に携わる人がいつか一つの「幼児教育観」を

もつに至るのは、日頃幼児と接していて体験的にハッとしたり、驚いたりしたことが誰かの幼児思想と出会い、あるいは自分なりにその体験の意味を考察するうちに深まっていって、一つの理論的な体系を形づくっていくのではないだろうか。ただその際、どのような幼児教育思想に出会うか、あるいは体験の意味をどのように考察するかというのは、いろいろな過程を経ても何らかの形で自らが選択したものであるということだ。

この「選択」にあたって、何が一番強く働いているのであろうか。人それぞれに「選択」をせざる強力なものがあるように思う。私の場合は、子ども時代のある経験に基いていることに気づいた。それは一九四五年の八月、広島・長崎に原爆が落とされてから終戦に至るまでの数日間の出来事であった。私は当時小学校の二年生で、家族と共に東京に住んでいた。東京の大空襲も何度か体験し、その都度、家から母や弟と少しでも煙にまかれないでいられる空地を求め逃げ出していたのである。

ところが原爆が落とされた八月六日以降は、外に出るのは危険だから防空壕に避難しなければならないという。それまで各家庭の庭先に掘ってつくってある小さな防空壕は家財道具を入れるのはよいが、人間が入ると空襲で大火災になった時、煙で「むし焼き」になるからだめだと教えられていたのだ。子ども心に、今度空襲になったら、自分は「むし焼き」になってしまうと思い、親たちに「どうして防空壕に入るの？ むし焼きになるじゃない。」と何度も尋ねたが、親たち大人はこの私たち子ども

の問いに答えることは出来なかった。

それから数日して終戦になり、国民学校は小学校になり、一時閉鎖されていた学校が再開され行ってみると、かつてその前で校長先生が、うやうやしく教育勅語を読んだ校庭のすみにつくられてあったお宮も天皇の御真影があるといわれ、最敬礼をしなければ通ることのできなかった御堂（何といったのか）もすっかりとり払われ、建物のあとの礎石だけが残り、まわりに敷きつめられている美しい玉砂利と共に私たち子どもの格好の遊び場になっていた。この時から私は大人の言うこと、することには矛盾があっても必ずしも信用できるものではない。子どもの生存すら保証しないのだと漠然と感じはじめていた。

その後、大学に入り、子どものことを学ぶようになってから、いろいろな幼児教育観に出会い、少しずつ自己にとり入れるようになってきているが、それらを選択する時に、この子ども時代の経験が深く影響していること

が齡を重ねるに従ってわかつてくる。

大人は子どもに絶対的な価値などを示すことはできない。せいぜい価値の方向性を示す位である。むしろ、迷いながらも子どもと出会って共に新しく方向性を創っていくことが必要なのである。子どもにとって良いものは大人にとっても良いものでなければならぬ。何が良いものなのか、何が価値なのか。大人が子どもと共に見出し、新しく創りだしていくこと——これは大変難しいことである。よく大人が「子どものことを考えて」とか「子どもの立場に立って」子どもの為に行っていることなのだということがある。大人が「子どものことを考える」時は、あくまで、大人の立場で「子どものこと」を考えているのであり、「子どもの立場に立って」と言っても、大人は子どもの立場になど立つことは出来ない。立っているような幻想を持っているにすぎない。子どもは大人のこの欺瞞性を見ぬく力を持っている。子どもの意見を尊重しているようで、大人の方向性に合うものだけを選んでいることがある。

ある幼稚園でのことである。この幼稚園ではかねてから子どもたちが自発的に発言し、子どもたちの意見によって物事をまとめることをよしとしている。ある時、お屋の飲物を配るのに、どうしたら早く能率よく配れるかを子どもたちに話し合いをさせている。四歳児なりに活発にいろいろな意見が出る。しかし先生はなかなか子どもたちの意見をとりあげない。最後に一人の子が小さな声で言った「当番を決めればいい。」という意見をとらえて、「ハイ、Aちゃん、もう一度言って」とその子の意見を全体の中で目立たせて、結局先生のはじめから意図している「当番制」にする。その時子どもたちは、自分たちも意見をいったのに何故取り上げられないのか漠然と不満を感じていてもはつきり言うことはできない。何だおかしいと思う。子どもたちは納得しない顔をしている。子どもたちの自主性を育てようとしながら結局は大人の方向に引張っていく。

そんなことは当り前のことだという人があるであろう。「大人は幼児に較べたら長いこと生きていて、世の

中のことをたくさん学んでいる。大人が子どもに価値を

教えなくて誰が教えられるのだろう。もっと教師も親も自信を持って教育に当らなければ……云々。最近は特に我々戦中から戦後にかけて育った自信のない親、教師が子どもを育てるから、校内暴力など、非行が増えるのだと世間の風当たりも強い。しかし少し待ってほしい。私は大人が子どもの後からついていって、子どもの言いなりになることが望ましいと思っているわけではない。大人は子どもの後からついて行ったとしても子どもが危険な方向に行くように見えたら、やはり子どもの前に立ちふさがって行手を止めてしまうであろう。あるいは、子どもの心に沿ってついて行くのも幼児期で子どもが大人の予測を裏切らない範囲で行動しているうちは可能でも、青年期に近づき子ども自身の価値観で行動するようになった時、同じように行けるであろうか。又反対に大人の方向性、大人の価値観で子どもを引張っていくとしても、幼児期はともかくとして青年期までそれを維持することは困難であろう。急速な断絶がやってくる

かも知れない。

では大人と子どもが出会って、共に新しく方向性を創り出すにはどうしたらよいのであろうか。大人も子どももありのままの自己をぶつけ合って進む以外にはないのではないか。大人が子どもを理解することは本質的には不可能である。大人は子どもそのものになることはできないので、理解したと思っていることは大人の立場で、子どもとの関係を変えようとして少し近づいたということであろう。はじめから子どものことを理解することは不可能だと思いつつ、それでも共に手を携えて、子どもとの関係を少しでもよくして行こうと努力することが大切なことだと思う。そのためにはありのままの自己を大人も子どもも出し合うことである。自分が感じている最も重要なこと、自分が大切にしていること、自分の考えを追究すること等である。それには大人も子どもも自己の確立が必要であらう。子どもにとっては自己が育つ過程にあるので、確立というところまでいかないが、各発

達段階での子どもの自己が育っていることが重要である。それを授けるのが親として、あるいは子どもの教育に携わる大人の大切な役割となる。しかしそのためには大人自身の自己も十分確立されていなければ、何故子どもにとって自己を育てることが重要であるのか真に理解することが出来ないのではないか。

ところが現代は我々大人にとっても自己を確立するの  
がきわめて難しい時代なのだ。自己は常に関係における自己<sup>\*</sup>であって、他者との関係、自己自身との関係、物（有機的、無機的）との関係を担っている自己であるから、これらの関係にどのように自己がかかわることが自己を確立することになるのか。人が他者との関係で、真にその人を尊重し、かつ自己を大切にしようとするならば、支配したり支配されたりすることなく、又一方が他方の犠牲になることなく、互いに生かされ合う関係になるであろう。今、我々大人の世界で、真に互いに生かされる関係を創り出すことが如何に難しいか。個人と個人との関係では可能であっても、個人と組織（あるいは集

団）となると又一層困難となる。個人が集団に埋没していれば、一見平穩無事に過ぎるかも知れないが、一旦、集団の中で個人を生かそうとすると様々な軋轢や障害が出てくることが多い。又物との関係でも人は自らの創り出した物質文化に押しつぶされそうになり、物の法則に振りまわされて自己を見失いそうになっている。人がどのような状況においてもこの自己も人も、物をも生かせるか<sup>\*\*</sup>かわり方が出来ることが真に自己が確立している状態といえる。

こうして大人が真に自己の確立をしていれば、子どもの自己を尊重することの意味を捉え、子どもの自己を育てることに努力を惜しまないようになるのではないか。子どもの自己が育つということは、子どもなりに自分の要求、自分の意見をはっきりと持つことである。この点、我々日本人は日本語によって小さい時から育っている、主語をはっきり示さなくとも通じてしまうことが多い。それだけに誰がどう思っているのか、関係の中できわめてあいまいになってしまふことがあり、自己が

育ちにくい面がある。子どもが小さい時から、「あなたは、どう思うの？」とたえず聞かれる場合とは異なる。それでも大人は子どもの自己が十分に表現され、発揮できるように育てることが重要であろう。幼児期から子どもが、常に自分はどう感じ、どう思っているのか表現できるように大人が授け、働きかけることである。又大人も子どもに自分の感じていること、どうしても大人として譲れないことについて、自分はこう考えているということ子どもにごまかさずに、辛抱強く言いつづけることである。大人も子どもも自己が確立していれば、ぶつかり合っても互いに、他者の自己の存在に気づき、妥協点を見出し、自己とはちがう他者、多様な価値観との共存を認めることが可能になるであろう。ここに大人と子どもが出会い、新しく共に方向性を創り出していくことの可能な関係的基盤ができるであろう。

私は幼児教育に携わる人にとって重要なことは、子どもについての理解だけではなく、如何に子どもにかかわ

る自己があるか、あるいは単に子どもだけではなく、子どもをとりまく世界に自己が如何にかかわるかを捉え、実践することであると考えている。

(立教女学院短期大学)

\* 元お茶の水女子大学教授 松村康平氏によって創始された関係学の立場による自己のとらえ方である。

\*\* 同じく関係学ではこれを自己・人・物の接在共存状況という。

